

伝統文化を学べ、健康増進にも役立つ 能楽を普及させたい

宝生流 能楽師 小林晋也さん



- ◆小林さん出演の公演
12月14日(土) 12時より五雲会
能「忠信 シテ」 宝生能楽堂
鑑賞券 一般5千円 学生半額
- ◆こだいら雑学文化塾 講師
1月19日(日) 1時30分
「能ってなあに？」 小平市福祉会館
- ◆小林さん連絡先
tel/fax 048-479-6608

小林晋也さん(39歳)は市民サークル「能楽を楽しむ会」を主宰して10年になる宝生流の能楽師。11月から12月にかけて同会東村山教室では、5回にわたり初心者向けの稽古体験教室を開催。とかく敷居が高く、難しいと思われがちな能楽を身近に楽しめるように、小林さんは普及に努めている。今回はその最初の体験教室が開かれる柴町ふれあいセンターへ伺った。

健康のために役立つ謡と仕舞

この日に参加したのは6名の方たち。「以前からお能に関心があって、やってみたくて思っていたのですが、近くに教室がなくて、今回の募集を知ってすぐに申し込みました」という小平や清瀬からの参加者も。この教室



稽古は普段着で足袋のみ持参



普段はラフなスタイルの小林さん

では世阿弥の代表作の一つ、結婚披露宴でもおなじみの「高砂」を謡い、舞う体験をするというもの。謡(謡曲)は能の音楽部門で、フシの部分とコトバの部分がある。その詞章、節付けをした謡本(うたいほん)が読めるようになるまで5、7年かかるという。今回は高砂の待謡とよばれる一節を稽古し、5回目には仕舞とともにミニ発表会が予定されている。

まずは先生がお手本を示す。声量ある朗々とした謡が周りに響く。音階部分は、かの有名な「高砂や此浦船に帆をあげて・・・」である。続いて少しずつ区切って、参加者が先生のあとについて謡う。

「とにかく大きい声で、しっかりと息を出して。謡の呼吸法の基本は水泳の息つきと同じです。鼻濁音も使い分けられるようになりますよ」

みなさんがプリントに赤鉛筆で朱付けする表情は真剣そのもの。稽古が進

むほどこに「そうです。パッチリパッチリ、すばらしい」と先生の励ましの声が飛び、熱を帯びた雰囲気。腹式呼吸でお腹から声を出すため、気管支が鍛えられる。お弟子さんの中には熱心に稽古をして、喘息が改善された方もいるという。江戸の頃から「謡十徳」などと言われて、大きな声を出すことは健康にいい、と十徳のひとつに挙げられている。何よりストレスの発散にも役立ちます。

一方、仕舞は能の一部を面、装束を着けず、紋付、袴のみで、地謡(コーラス)と舞手だけで、ごく短い聴かせ所観せ所を舞うもの。立ち方の基本は膝を少し曲げ、腰を入れ重心を落とした構え。摺り足、扇の持ち方、動かし方。一人一人にアドバイスする先生はもうこの時点で汗びっしょり。

このように能の身体技法はインナーマッスル(深層筋)を駆使するため、体にとってもいい効果をもたらす。日本古来の歩き方である。ナンバ歩き(右手右足、左手左足の身体所作)を

現代でも用いている。この歩き方が脳を活性化させ、腰等に負担をかけない歩き方だと近年注目されている。エネルギーで熱のこもった指導で、稽古は2時間の予定を30分余りオーバーして終了。「難しいけれど楽しい」能楽の世界に一歩足をかけた方の感想だった。

能楽師小林家の4代目

小林さんは曾祖父から続く能楽師4代目。父、与志郎さんに5歳から謡と仕舞の手ほどきをうけた。6歳で第十八世宝生宗家に入門。7歳の時に子方として初舞台を踏む。

「家元はこわくなかったのですが、父の稽古はおっかなくなっていて、同じことを習うのに1回、2回の失敗はいいのですが、3回目には手がとんできました。スパルタで犬のしつけと同じよう。泣きながらお稽古していました。正座しているだけでもつらかった」

そんな父も稽古が終わると、普通の

父親へ戻るのが常だった。小学生の頃はプロサッカー選手か科学者への夢もあった。「お稽古がイヤでしょうがなかったのですが、自分からやめるとはいわなかった」と小林さん。父の稽古は習い事ではなく、プロになるための厳しい導きだったのだろう。「今は能の体の動かし方が何の苦もなくできま

すから、体にたたきこんでくれた父に感謝しています」。

能以外のことは何でも母に相談した。母親は日舞の名取。「いろいろな方とご縁ができる能楽師は良い仕事よ」と母の勧めもあり、高校卒業後は家元の書生として住み込みの生活

が始まった。当時このような直属の内弟子が9人もいて、家元のところと宝生能楽堂を行き来する毎日だった。同じ釜の飯を食う内弟子仲間はずらやばいながら、連帯感でつながった同志。年中無休、新座の実家へ帰省できるのは夏と冬の休みだけだった。10年間修業を積み、独立後は国内外公演への出演とともに、能楽普及のために飛び回る日々だ。

能楽普及へのさまざまな活動

東村山や狭山、新座、浦和、田端などの能楽市民サークルの主宰。学校

の部活動や自身の弟子の同門会「宝会」での指導。年に3回長崎のお弟子さんの稽古にも出向く。また、市民講座や能に所縁ある地への旅行会、鑑賞会、他のジャンルの芸能とのコラボレーションなど精力的な活動を続けている。「人みしりをしないので、教えることが大好き」という通り、気さくで明朗闊達、指導にアツクイ情熱を燃やす。60歳でようやく一人前と認められる能の世界。小林さんはまだまだその途上、今後の小林さんに期待したい。

▼月3回(木曜)主に東村山中央公民館で稽古中。見学会随時。